



繪本通俗排悶錄

前篇

卷八

又
淺

遠
1.192
84



告白

凡そ此の巻中見返ハ勿論其他ありて聊々余白あれば
或ハ猥褻なる畫圖を寫し或ハ卑俚ある語辭を書し
其の甚しきに至りて挿圖を彩りて却之を澆きのみふらび
塗抹して以て其の何れかを解き能いざらむる者あり
何を其れ思ひぞ。此甚しき乎夫れ此書籍ハ我が貸し
以て業とあり所のものなり故よ之を澆がさるるふ於て頗る
營業ハ損害あり營業ハ損害あるに於て之れハ償金を
要せざる可らび仍て豫しめ此ハ告白し置と云爾

新稿 長門屋主人識



通俗排悶録卷之六

琦行之部

目錄

龔翊

張復

蘇門三賢

劉以平

韓壻

張

亞盡

門遠 1192 8止

漢玉項

明治三十八年二月一日

佐藤静夫氏寄贈

趙遜

安成七

徐妙錦

萬義顯

沈雲英

賣腐人女

益都人妾

合十四種

通俗排悶録卷之二

琦行之部

龔翊

六樹園翁 譯

全亭正直 校

龔翊字大章。崑山名地の人。とて金陵名地に住せり。年十七にして金川門の

卒とす。永樂帝の時。靖難の兵至り。時王徳の并李

景隆名將の門を閉て出迎降参す。翊拒む力る。声をあげて大に哭す。其

場を立退き。故郷に還りて諸生を教授するを業とす。貧乏安んずるを好む

る人。宣徳帝の比周忱其地の巡撫なり。翊を薦めんと云々。時翊蒼て

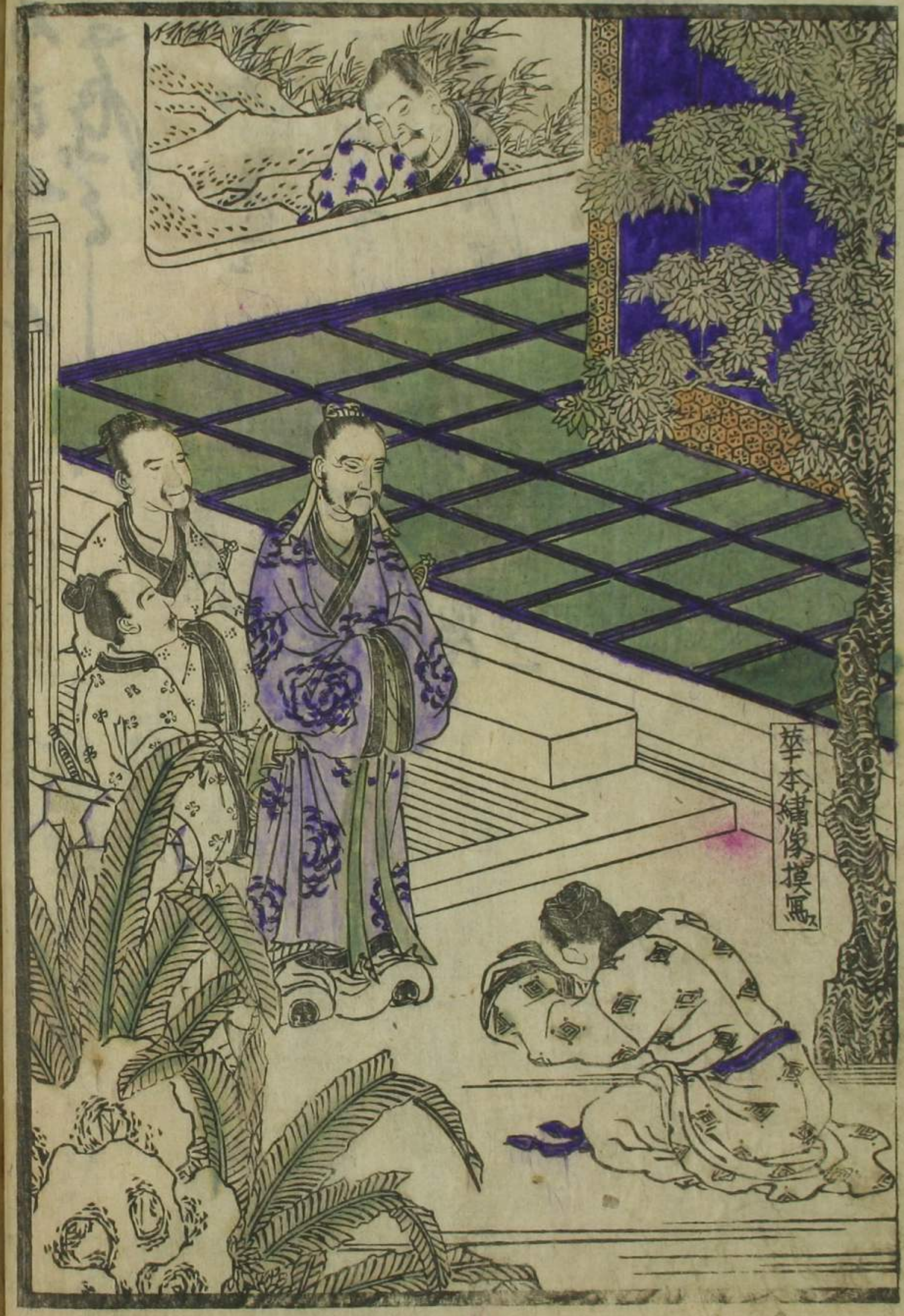
曰。翊今仕へんる。義不於と妨る。然と共若仕へる。先年城門の働哭の偽は

さうん夏を恐ると云々。辭して仕へず。田三十畝ありるを。自耕して食ひハ

びつら。後左淳邱。魏廓園と云賢者の官官禁裏の側のこの難ふむひ
 都又召し問はし。時皆張が家を宿ゆぞ。其後張の孫徵
 君の後ひと蘇門の入り。遠く世を避け隠まると。此地ゆく終まり。夏峰村
 の北原の葬る。徵君其傳を作る。同時の彭了凡と云入。蠡縣の人の
 舊を諸生に傳へ。後河朔の地。徵君又後ひと居ると。此土の
 人粟を與ふ。受けて。竟の哺臺の名の傍に死すと。徵君其墓の
 夫墓と題すと。又理壘和字の寒石と云へる。西華の人の。本姓の李
 あり。鳳賊李自成と同姓あるを恥と。理と改まると。詩文若干あり
 しくども。亂を経と。皆散失ぬ。徵君西華の左令が書を貽と。理が老母幼
 孫を恤と振へり。理を稱と。魯仲連賢者以後一人と云ると。

劉以平

劉以平字の近塘と云人。猗氏地名の産。同邑の劉氏の女を聘し。未引
 取。其中の女病出来と。廢人あり。故已むるを得ぬ。竊に次の女
 をとり。遺す。合色の夜。以平女の病る容るを恠と。媒を尋る。有
 のもの。格で。以平懐し。死る。思と。曰。吾聘せし。女を病む
 事。棄る。不義也。且嫁し。えざる。事を悲み。命のほ。と。量
 だ。然。次女已。我家。来つる。を。還さ。も。道理。有る。是。第。以
 寛。妻と。ま。と。曰。止。り。置。さ。更。に。姉。女。を。迎。へ。り。姉。を。果。し。と。嫁。し。得
 ざる。を。悲。と。自。害。せ。んと。居。る。と。以。平。の。迎。へ。と。喜。く。思。ふ。故。と。
 病。も。程。り。癒。と。兄。弟。同。日。に。婚。禮。を。す。り。ける。後。萬。曆。年。庚。申。の。年。の。



以平進士とあるぬ。

韓婿

項城の韓婿と云人戚氏の女を聘し多るが發程もあつて其女亡盲目とあり
多る女父母の命を韓婿少半すといふ文を能せり。定て行末常並の人と
あつた。然るに盲女を與へて婦とせしめんる其甚不可あり。所詮婚を辭
て女生涯家終らせんと。必ひ定め其由を韓婿家言遣はす。韓婿が父
母の言をせざる如くせん。必ひけ共韓婿聽む。遂に親迎し多る。戚氏の
を得て多る。美婢を擇む。勝女とて遺し多る。韓婿曰美色を乞ふ心動
く。人情のなる美女を止むを夫婦の好を全くせざる端とて其婢を直に
還しけり。後韓婿壬子の年。御選に奉りて教諭の官学校の役名とあるも婦を

推乃と借み行き。始終甚睦あり。豫列の人其篤行を稱し。宋の
劉廷式復此世を見えたりとぞ言けり。

張二

巧者張二と云者。何國の人と云定あるも。善水中又入又能一月も食へど
しと居るを得る。其上飛走甚捷ありけり。嘉靖甲寅の年。日本
の海賊の乱ぬ。太守の催ぬ。兵卒とあり。利器を持て水入敵の舟
底を撃て舟を沈め。或る敵陣に忍入て首を取来り。太守銀牌を與へ
て。擣へ共受け。酒を與へば則受り。敵退る。後其功を論じ。百戸を
賜ふ。金たふ當まる。依て郡縣する。其相當の章服を授け。皆辭し
て受け。奮の如く巧者とあり。嶽廟の中臥し。平常少しも愁あり。

色をうりたる。其始如何ある人ゆりたる。斯る大難を解れ大功と立
く富貴を辞せし。昔の魯仲連が行事よく似たる人あり。

亞儘

亞儘と云者、廣東增城縣の獄卒、性質朴直、誠實なり。萬曆
戊午の歳の暮、囚人五十餘人聚りて、位居るを乞ふ。亞儘何故ぞと
問ひ、囚對て、新歲旺近、びぬ邑の者共、父母妻子、聚りて喜ぶ、
らんぬ我等、此獄中、居る。還るを得ざる。故に悲ありと云けり。亞
儘首を傾け、暫思案し、居るがふと囚人等、向ひ云く、其の安き
を乞ふ。但汝等、我の義理を忘るる。と云く。囚皆怪し、其故を
問ふ。亞儘曰、我今兩等、暇を乞へ、還さし。正月二日、皆悉獄へ歸り

來りし。必約の違ある。我私に兩等を縱り、其罪死を免まじ。亦
あり。此中、入めども、亦る者あり。我死罪に陥らんとせむ。況や
悉く返らざるを。然れども、今日、縱令等を乞へ、置る。家へ還さし。と云
若我壽命盡む。必死せむ。畢竟如何し。死するも同事也。一こ快
るを乞ふ。死せんと乞ふ。と云く。悉縱し。家へ還し。明年正月
二日、囚人皆悉歸り來り。籍を叩く。名を呼改め、一人も逸らざる。此の縣令、
けり。亞儘掌を打く。大に笑ふ。善哉と云畢す。其や、跣坐し。死する
囚人皆哭し。拜し。其體を沐浴し。漆をぬり。とぞ収めたる。此の縣令、
也。今、令を巡按御史、言し。上げ朝廷へ達し。其縣の獄神とぞ。
ける。今、至る。祠あり。疾疫癘の類、禱ると心驗あり。

あらるるの。

趙遜

順治^羊の初^羊京都^羊の趙遜^羊と云者^羊ありて水^羊を賣^羊を業^羊とて廿^羊歳^羊餘^羊ありて
 父母^羊あり。妻^羊あり。其^羊の朋友^羊共^羊各^羊助^羊力^羊ありて婦^羊を求^羊む。入市^羊中^羊中^羊女^羊二人
 を銀^羊二百^羊兩^羊買^羊來^羊て。叔^羊合^羊番^羊をよる。時^羊面^羊の蒙^羊りて。帕^羊を取^羊去^羊け。入^羊
 白^羊髮^羊の老^羊母^羊ありて有^羊多^羊。趙遜^羊興^羊ありて。其^羊の直^羊一^羊と云^羊。其^羊の五^羊日^羊少^羊年^羊を
 以^羊て老^羊嫗^羊を婦^羊とよる。其^羊のい^羊る^羊を^羊。其^羊の吾^羊母^羊とて。事^羊へん。勝^羊の
 世^羊話^羊を^羊と云^羊。其^羊の老^羊嫗^羊を^羊と云^羊。許^羊容^羊ありて。斯^羊く數^羊日^羊
 を経^羊る。此^羊嫗^羊を^羊。其^羊の甚^羊殷^羊勤^羊ありて。其^羊の嫗^羊感^羊ありて。曰^羊。女^羊朋友^羊の助
 依^羊て妻^羊を求^羊めんと。不^羊幸^羊ありて。我^羊を買^羊ひ。財^羊をも妻^羊をも皆^羊失^羊へ。吾^羊母^羊

みくを^羊。珠^羊あり。其^羊を以^羊て再^羊び妻^羊を求^羊む。其^羊の帯^羊の中^羊に縫^羊ひ置^羊。
 珠^羊を^羊。其^羊の銀^羊二百^羊日^羊易^羊得^羊。又^羊市^羊に往^羊て。女^羊を二人^羊買^羊來^羊す。
 此^羊女^羊老^羊嫗^羊を^羊。大^羊哭^羊。其^羊の故^羊。遂^羊怪^羊と尋^羊問^羊へ。即^羊其^羊嫗^羊が女^羊あり。
 世^羊の代^羊り。其^羊の情^羊あり。離^羊散^羊せ。後^羊各^羊所^羊に流^羊浪^羊。久^羊く逢^羊
 此^羊家^羊あり。始^羊て相^羊見^羊。其^羊の嫗^羊に洪^羊洞^羊の地^羊あり。其^羊の畜^羊死^羊仕^羊官^羊の家^羊あり。
 其^羊富^羊と栄^羊え。男^羊子^羊二人^羊有^羊。兵^羊乱^羊あり。斯^羊く成^羊す。今^羊を
 母子^羊相^羊聚^羊。其^羊の故^羊郷^羊に歸^羊。其^羊の藏^羊あり。其^羊の王^羊を取^羊出^羊。其^羊の猶^羊百^羊餘^羊
 顆^羊あり。其^羊の悉^羊賣^羊。其^羊の路^羊費^羊あり。其^羊の嫗^羊并^羊夫^羊婦^羊打^羊連^羊。其^羊の家^羊に歸^羊。其^羊の二人^羊の男
 子^羊あり。其^羊の思^羊あり。其^羊の大^羊喜^羊あり。其^羊の家^羊財^羊を^羊。其^羊の二人^羊の男
 子^羊あり。其^羊の今^羊の趙^羊遜^羊夫婦^羊あり。其^羊の與^羊あり。其^羊の富^羊人^羊と成^羊夫婦^羊睦^羊く

非月録卷之六

一生を過しつるにあはれ

安成之

吉列の安成地^{あき}名^なゆ^ゆ人^{ひと}の^の項^{かた}の^の下^{した}の^の大^{おほ}なる^の瘤^{しこ}あり^{なり}。其^{その}姓^{せい}名^なを^を知^しる^者あり^{なり}。云^いふ^人ある^もとも^も生^な得^{とく}施^せを^を好^{この}む^人。其^{その}負^{おん}け^の者^{もの}ゆ^ゆ己^{おの}れ^の入^いぬ^人を^を云^いふ^人は^は米^{こめ}錢^{せん}を^を與^{あた}へ^り。若^し恥^ぢと^し受^うけ^る者^{もの}ゆ^ゆ其^{その}殊^{こと}ゆ^ゆ之^の時^{とき}を^を伺^うへ^り。米^{こめ}を^を其^{その}家^{いへ}に^に持^も持^も往^むと^と預^{あづ}け^置き^終ひ^取り^ぬ。み^行ぎ^とく^をな^めぬ^其地^ちゆ^ゆ一^{ひと}人^のの^の致^{いた}す^婦あり^{なり}。女^{むすめ}を^を云^いふ^人は^は木^きを^を云^いふ^人は^は能^{あた}へ^り。彼^かゆ^ゆ人^の此^こを見^みる^人。夜^よ薪^ぎを^を荷^かぐ^其口^{くち}の^の置^おき^歸り^終ひ^入ぬ^人は^は悟^{さと}ら^ず。其^{その}里^{さと}の^の小^{せう}路^ろゆ^ゆと^と存^{ぞん}ず^る橋^{はし}ゆ^ゆ損^{そん}じ^壞ら^ずる^のゆ^ゆ此^こゆ^ゆ人^の土^{つち}を^を荷^かぐ^運び^とく^一人^のゆ^ゆ修^{しゆ}復^{ふく}し^る故^ゆ郷^{きやう}入^いり^多く^其義^ぎゆ^ゆ感^かん^じと^とす^此人^の一^{ひと}度^{たび}物^{もの}を^を乞^こ得^{とく}る^家あり^{なり}。其^{その}年^{とし}一^{ひと}と^と行^ゆ事^{こと}あり^{なり}。常^{つね}々^{つね}人^のゆ^ゆ云^いふ^人は^は我^{われ}先^{せん}代^{だい}の^の富^ふ豪^{かう}あり^{なり}。一^{ひと}が^の金^{きん}錢^{せん}

を人^{ひと}に^に貸^かす^利息^{しき}を^を取^とる^者あり^{なり}。過^と刺^しあり^{なり}。故^ゆ其^{その}報^{ほう}我^{われ}ゆ^ゆ來^きり^也。斯^{かく}ゆ^ゆ人^のと^とあり^{なり}。其^{その}上^{かみ}癩^かあり^{なり}。身^み自^じ由^ゆあり^{なり}。云^いふ^人は^は賢^{けん}人^のあり^{なり}。曰^{いは}此^こゆ^ゆ人^のを^を負^{おん}け^らむ^者各^{おの}づか^らに^に善^{ぜん}を^を勉^{つと}め^る。先^{せん}代^{だい}の^の為^{ため}に^に罪^{つみ}を^をな^すと^とせ^り。且^{かつ}を^を世^よの中^{なか}に^に正^{ただ}し^める^者あり^{なり}。心^{こころ}の^の賤^{せん}を^を共^{とも}に^に有^ある^者あり^{なり}。愧^{かたじけ}なく^と思^{おも}ふ^人あり^{なり}。

徐妙錦

明^{めい}の^の中^{ちゆう}山^{しん}武^ぶ寧^{ねい}王^{わう}名^なを^を徐^{じゆ}達^{たつ}と^とす^四人^のの^の女^{むすめ}あり^{なり}。姊^{あね}ハ^ハ燕^{えん}王^{わう}に^に嫁^{よめ}す^燕王^{わう}帝^{てい}位^いに^に即^{すなは}時^{とき}皇^{かう}后^{こう}と^とす^則仁^{にん}孝^{かう}文^{ぶん}皇^{かう}后^{こう}あり^{なり}。次^{つぎ}ハ^ハ代^{だい}王^{わう}に^に嫁^{よめ}す^一と^とす^妃と^とす^其次^{つぎ}の^の女^{むすめ}を^を妙^{めう}錦^{きん}と^とす^美色^{しき}あり^{なり}。己^{おの}れ^の入^いぬ^人を^を嫁^{よめ}せ^り。其^{その}妹^{いまい}を^を安^{あん}王^{わう}の^の妃^きと^とす^洪武^{かうぶ}の^の年^{とし}未^まゆ^諸の^の藩^{はん}困^{くわん}辭^じあり^{なり}。己^{おの}れ^の代^{だい}王^{わう}も^も獄^{ごく}に^に下^{くだ}り^也。妙^{めう}錦^{きん}熟^{じゆく}世^{せい}の^の形^{かたち}勢^{せい}を^を感^かん^じと^とす^誓言^{ちかご}を^を立^たて^て嫁^{よめ}せ^り。諸^{しよ}王^{わう}も^も婚^{こん}を^を求^{もと}む^者あり^{なり}。皆^{みな}拒^{かへ}り^許さ^ず。長^{ちやう}姉^し



葎木舗像模寫



胡逐妻を
 求めんとて
 誤り二百兩
 老嫗成
 買ふ

木蘭鏡

仁孝文皇后崩（のち）後（のち）文皇帝（のち）妙錦（のち）が美色（のち）なり。然（も）も賢（い）なるを（き）受（け）く。聘（へい）し（き）後（のち）と（き）玉（ぎよ）へん（と）と。内使（うち）女官（にょ）を其家（その）に遺（つ）す。其旨（その）を諭（さと）す（心）。妙錦（めう）病（びやう）を言（い）ふ（と）出（い）で（お）女官（にょ）其臥榻（お）の下（もと）に往（ゆ）き視（み）ま（す）妙錦（めう）を衾（きん）を被（お）く（しん）吟（げん）し居（ゐ）る（を）女官（にょ）假病（かり）あり（と）察（さ）し叩頭（くわう）し命（いのち）を受（う）王（わう）へ（と）請（こ）け（ま）己（おの）む（る）を（お）起（お）上（の）と（い）曰（い）吾（わが）貞容（せい）よく（も）わ（ら）む（と）六宮（りく）の選（えん）備（び）へ（ら）る（を）免（ま）れ（ば）非（た）ず（と）云（い）ふ（を）女官（にょ）跪（ひ）く（と）審（しん）み（其）顔（か）色（し）容（よう）顔（げん）戎（じゆう）視（み）ま（す）清（きよ）ら（ぬ）美（み）事（じ）恰（た）も（天）人（てん）の如（ごと）く（急）死（し）歸（かへ）り（有）の（ま）あ（ら）奏（そう）し（け）も（妙）錦（めう）を再命（さい）の（あ）ら（ん）る（を）恐（おそ）ま（る）髪（かみ）を剃（そ）り（尼）と（さ）る（と）天子（てん）此（こ）の（成）俊（しゆん）の（重）と（別）の（皇）后（こう）を（立）玉（ぎよ）へ（ら）る（と）天子（てん）崩（お）れ（後）又（初）の（容）の（復）し（係）を（宜）徳（い）年（ねん）の（初）の（張）太（たい）后（こう）妙錦（めう）の（行）の（潔）なる（成）俊（しゆん）及（初）の（容）の（復）し（係）を（宜）徳（い）年（ねん）の（初）の（張）太（たい）后（こう）妙錦（めう）の（行）の（潔）なる（成）俊（しゆん）及

王（わう）の（女）官（くわん）を以（も）て（京）の（徴）と（道）の（程）の（中）使（し）命（めい）し（守）護（ご）せ（し）既（すで）に（宮）の（内）へ（入）り（太）后（たい）の（見）え（自）徐（じゆ）達（たつ）が（第）二（の）女（にょ）と（称）し（肅）拜（ぱい）す（其）形（か）義（ぎ）端（たん）正（せい）と（一）歩（ぽ）も（違）へ（ら）る（と）太（たい）后（こう）以下（い）下（げ）皆（みな）尊（そん）敬（けい）し（玉）の（贈）物（ぶつ）ヨ（ク）わ（け）宮（みや）女（にょ）共（ども）の（各）各（ご）の（語）と（曰）此（こ）人（ひと）を（命）を（辭）し（皇）后（こう）の（命）を（受）け（入）り（心）を（置）あ（ら）後（のち）正（せい）統（とう）中（ちゆう）の（身）ま（り）り（鐘）山（しやう）地（ち）なる（家）の（墓）所（ところ）に（葬）す（始）燕（えん）王（わう）の（師）京（きやう）に（至）り（時）建（けん）文（ぶん）帝（てい）明（めい）自（じ）焚（ふん）死（し）し（玉）の（妙）錦（めう）を（ゆ）め（曰）及（今）軍（ぐん）至（き）る（と）帝（てい）之（を）殿（てん）上（じやう）に（坐）す（燕）王（わう）を（待）玉（ぎよ）の（死）し（王）の（命）を（受）け（自）天子（てん）と（死）す（万）一（ま）左（さ）わ（ら）ん（時）の（死）し（王）の（命）を（受）け（何）故（なに）處（どこ）に（焚）死（し）し（玉）の（命）を（受）け（何）故（なに）處（どこ）に（焚）死（し）し（玉）の（命）を（受）け（何）故（なに）處（どこ）に（焚）死（し）し（玉）の（命）を（受）け

萬義顯

義顯と鄧縣縣名の萬氏の女あり。祖父ハ萬斌高帝ハ從つて兵を起
 一指揮の官なり。北征北國討死す。其子萬鍾其職禄をつぐ。即義顯
 之父なり。是も遜國の難ハ死して。義顯ハ長兄萬武其跡を襲。是も亦
 交趾地名死して。子有る故其弟萬文みづかなり。射龍將軍と亦
 中。海賊を禦て海中死して。萬文ハ妻吳氏懷妊し居るが程有男
 子を産む。名を全と云。其時萬文ハ母と存生あり。嫂陳氏ハ子あり。義顯
 盛年ハ至りて。昏を求むる者多し。爲るが義顯家の漸ハ衰へてを
 兄ハ嘆して曰吾家三代の間ハ四人も皆死して皆骸骨之家ハ歸
 らば。今發婦三人家をたれり。一人の孤を守立んとす。誠ハ祖宗の血脈を
 唯此孤ハ入るあり。我ハ捨るふ忍びず。其上我若嫁せば家の爲ハ一臂ハ残

失ふ如くあるべし。悉く并さむけり。家内も義顯を頼りて居
 たり。強も嫁を勧むるも。義顯日夜三人と力を戮せり。小兒を撫
 育し家を治め。年月を経く全ハ已ハ成童あり。父の官を嗣ぐ。其時義
 顯もづから先祖以来の戦功并ハ國の爲ハ死せしむる共を見り。如く書
 けり。全ハ與て心を勵し。先祖以来の志ハ承續下と教訓し。後義
 顯ハ七十歳ありて卒す。全其喪を勤る。母の如く萬氏の子孫ハ是を祀
 る。射龍將軍と坐を列ね世ハ絶ゆる事なし。

沈雲英

沈雲英ハ長巷里地名の沈氏の女あり。父至緒。崇禎四年。武科武藝
 の進士あり。雲英幼ありて父ハ隨て京ハ往來し。騎射を能す。

至緒昭武將軍の跡を贈り其祠を麻難驛に建ち一子を召せしむ
監國子監み入と雲英を遊撃將軍とす父の士卒を悉領せしむ其時
雲英が夫賈萬策を荆列の南門を守り居りしが荆列も流賊に攻破
られし萬策の節ぬ死し雲英此由を告ぐ號呼し吾命に絶
すといと哭し詔を辭し父の柩を扶く家歸る其後清の師西陵
地を渡り時雲英川に身を投死せんとしけるを母らうとて救ふ命
助す事能はんと云く塾中の児を皆家返し沐浴し臥し頃々
順治十七年白洋海上ぬ朝を觀帰す歎く曰吾久しく此土に
居る事能はんと云く塾中の児を皆家返し沐浴し臥し頃々

卒しけること

賣腐人女

亮列の豆腐を賣を業と居る夫婦の者あり本を北京の産あり
一が仇を避く南方に來り亮名を住む十年餘を歴く二百金を貯
け女子一人あり年十五六ゆく美色あり同郷に聘せんとす
者多し女の父母計く曰吾本北人先祖の墳墓親戚皆北方に
あり行々を故郷に還らんと欲あり然る今此地の女を嫁せむ往來甚
遠く便あり已に故郷を去り十年の餘に仇もなき盡ぬ然れ
今女を具しく故郷に還り親に家を擇み女を嫁せんと欲あり如何と云
け婦もむと同一頃々旅の装し鹽二匹雇ひ婦と女とを乗せ父を

歩行し道を急死する。二十里許も歩くと、馬の騎と弓刀を携ふ。西人の者不行遇。彼者共文の美貌を視、強と女を抱て己が馬の揺上げ策を加へ、馳去る。夫婦のの大駭、追懸て走。良く女を乞へ共賊計。夫婦の者の曰、吾五十金の貯。願く其金。女を贖んと乞ねるも猶許さ。次第に金を多く。終に二百金を得。賊其金を取くる。女をも返せしと去る。夫復つ死乞と悲け。刀を抜く斬殺す。婦を捉え、亦走つ死。泣啼ぶを是も同く殺し。又馬を弛く、數十里を行。道の傍に井あり。女伴と口唱けり。云ければ、賊共少女子恐る。不足らばと、馬を下し、扱水を汲んと。其器、女指さす。前の高樓の家、汲器ありと云ければ、實も入ら

汲器を借む。往々、女を今入の賊の少、怠る。同く井の中、小躍入る。賊周章、居る處へ入の賊、已に汲器を借来。此形勢を。急死。汲器繩を解く。井へ入。女を縛し、上る。賊頓と引上げ。縛を解く。復繩を下す。井中の賊、其繩をゆみ、結付。時上の賊、身を屈め、子を垂。力を引くと、引上ると、女をささす。力に任せ。後、賊を突く。誤。井の中へ突墜し。まぐさる。賊の馬を跨ぐ。高樓の家、馳往。有。事共を詳し。悟り。村人皆女を隨ひ来。井中を視、果。二。賊あり。引上視。入。頭を突折く。死。今入を以て死せざる。女賊の刀を抜く。忽、其首を斬落す。扱賊の囊を搜り、索め。奪。二百金。其儘あり。村人女を伴く。其列の守。詰る。女賊。逢。母



賣腐人の女
 謀を定め
 二賊を井中
 殺し父母に
 仇を報き



の死せしむの兵刃をむくいし形勢共の始末を詳に訴へけし守其金成
 吟味一叔人を遣へし其父母の屍骸を尋ねせし女の言少しを
 違ひりけし守大奇と稱し女に向て曰く汝父母は離れし入故郷は
 歸る共何方へ身を寄す死吾幸は子なり汝を吾子と誓を擇む
 汝を嫁せんと欲すといふと云くは女替首しと謝し其言は隨ひし守
 まるち女を署に迎へ入し兼て守の誓し諸生の才ありしを女に迎
 ぎ何某と云者を誓と定め女の金を倍しと粧奩とく嫁せしめけり
 此事を傳へ聞者女の奇節と守の盛徳と感とるく又感とるく康熙年
 中の事なりとぞ

益都人妾



益都の西鄙地は何某と云者妾をかくる其甚美あり嫡妻嫉妬
 しく日々小篋を加へ非道よりてりけし妾少くを怨める氣色あり
 けり或夜強盗十餘人其家ふかへ入り夫婦の者怖れ戦え居たり
 此妾暗き所より杖一握り出来り真先は進み賊三四人を忽に
 撃つ自餘の賊恐れ皆遁奔る妾声を勵し曰く鼠の如く奴原吾
 杖を汚し足とぬを奪う命を預かりたるを重く承るが必命を失
 せんを罵る賊去り後主何とく斯とあると問ふ其父の少
 林寺の武術を受け居りしが悉く女を傳へる故此妾を百人の敵と
 有る有り何故かと妻が非道員をりると問へ妾は妾は者へか
 てある處に苦ありと答ふ是後夫婦共此妾を元怪しめ都里

の者までも重んじ敬ひ奉る。

大日本一之貨本屋

新橋竹川町

長門屋

告白

凡そ此の巻中見返ハ勿論其他ありて聊の余白あれば
或ハ猥褻なる畫圖を寫し或ハ卑俚ある語辭を書し
其の甚しきに至りて挿圖を彩りて却之を宛きのみふれば
塗抹して以て其の何れを解き能ざるものも至る者あり
何ぞ其れ思ひて其の甚しき乎夫れ此書籍ハ我が貸し
以て業とあり所のものなり故よ之を宛かざるもふ於てハ頗る
營業に損害あり營業に損害あるに於てハ之れハ償金を
要せざる可らば仍て豫しめ此を告白し置と云爾

新橋

長門屋主人識

